

# 平和作文の文章表現指導に関する基礎的研究

——「文集ひろしま」に掲載された平和作文をとおして——

木本 一成

## 1. はじめに

戦後七〇年が経過し、学習者を取り巻く平和教育の環境が変わりつつある。たとえば、広島市の被爆体験の継承事業について、新聞記事には次のようにある。（※記事中に「20日」とあるのは、二〇一五年四月二〇日をさす。）

高齢化する被爆者から体験や思いを受け継ぐために広島市が3年間をかけて養成した「被爆体験伝承者」が20日、広島市中区の国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で伝承講話を始めた。……（略）……伝承者は県内外の30〜70代の男女50人で、平均年齢は約62歳。被爆者の体験や原爆被害の概要に加え、自身の平和への思いを語る。

小・中・高の教育現場では、これまで被爆者を招いて被爆体験を聞く学習が行われてきたが、この報道を見ると、今後は「被爆体験

伝承者」を招いての学習に変わっていくだろうと予想される。被爆体験伝承者が語る被爆体験は、語り手自身が直接体験したことではない。また、併せて被爆体験伝承者「自身の平和への思い」も語るという。これから教育現場では、重い使命を負った被爆体験伝承者をどのように受け入れ平和教育を展開していくのだろうか。

## 2. 研究目的

本研究の目的は、児童作文集に掲載された平和について書かれた作文（以下「平和作文」とよぶ。）を抜き出し、特徴を明らかにすることによって、平和を題材にした作文の学習指導のための知見を得ることである。児童作文を取り上げるのは、掲載された作品の多くが生活文であり、学習者の生活と文章表現力の関係に関連づけながら分析するのに適しているからである。また、生活文は、その後の説明的文章や文学的文章の土台になるものであり、小学校から中学校・高等学校の平和作文の学習指導への系統的な展開を考える上で有意義だからである。

### 3. 研究の対象

ここで取り上げる児童作文集は、広島市小学校教育研究会国語部会が編集・発行する「文集ひろしま 五・六年」である。この文集は、第一集が昭和三〇年（一九五五年）二月二十五日に発行され、二〇一四年度まで計六〇集が発行されている。対象とするのは、第一集から第六〇集までの五・六年生が書いた作文である。

この文集がどのように編集されたのかについては、植木・細井による説明が詳しい<sup>2)</sup>。以下にあげるのは、その説明の一部である（※本稿に関係する内容を抽出して示す）。

#### ・編集方針

(1) 広島市小学校児童に作文発表の広場を与えるとともに、作文に親しませ、表現力の向上を図るとともに、本年度の広島の子どもの生活や学習の様子を記し、心の働きを綴った文集とする。

(2) 広島市教育委員会版の「国語科指導計画」の作文題材と関連を持たせ、教師の作文指導上でのよい資料、保護者のためのよい参考資料、児童にとっての作文学習へのよい副読本になるように努める。

#### ・内容構成

(3) 作品Ⅱ生活文・日記・観察記録文・研究報告文・見学記録文・旅行記・意見文・読書感想文・詩など、各学年それぞれ

れ五〇〜七〇編程度掲載、掲載した各作品には、編集者が、一〇〇字程度の批評を付す。

(6) 国語科指導計画作文題材一覧表とのつながり表Ⅱ広島市の作文指導計画と、掲載作品との関係を一覧表にして提示し、指導、参考に資する。

これを読むと、この文集は、広島市内の全小学校を対象にしていること、国語科の作文指導との関連を重視していることが分かる。第一集の発行者は「ひろしま作文の会」であったが、第三集以降からは「広島市小学校国語研究会」（のちに「広島市小学校国語教育研究会」）に変わる。広島市教育委員会は、第一集から監修として編集に参加している。また、指導文については、小川利雄（第三集〜第四〇集）と神田和正（第四一集〜第六〇集）がそれぞれ長期間にわたって担当している。

### 4. 「文集ひろしま」における平和作文の掲載状況

「表「文集ひろしま」における平和作文の割合」は、「文集ひろしま」における平和作文の掲載状況を発行年度別に示したものである。この表のとおり、平和作文は全体で、詩34編、作文258編、合計292編ある。全作品数が、詩1745編、作文5521編、合計7266編なので、割合で見ると平和作文は全作品中の約4%を占めていることになる。この約4%という値が高いか低いかは、本調査だけでは分からない。今後、他の地域の作文集を調査し比較する必要がある。

表 「文集ひろしま」における平和作文の割合

年度	西暦	第〇集	平和作文						全作品						割合 (%)
			5年		6年		計	5年		6年		計			
			詩	作文	詩	作文		詩	作文	詩	作文		詩	作文	
29	1954	第1集	0	0	0	0	0	0	3	14	6	13	9	27	0.0
30	1955	第2集	1	0	0	1	1	1	7	26	5	26	12	52	3.1
31	1956	第3集	0	0	0	0	0	0	6	32	17	28	23	60	0.0
32	1957	第4集	0	0	0	1	0	1	15	33	7	36	22	69	1.1
33	1958	第5集	0	1	0	0	0	1	12	40	10	37	22	77	1.0
34	1959	第6集	0	0	0	2	0	2	10	39	9	34	19	73	2.2
35	1960	第7集	0	1	0	1	0	2	12	40	13	38	25	78	1.9
36	1961	第8集	0	0	0	3	0	3	13	44	18	41	31	85	2.6
37	1962	第9集	0	0	0	0	0	0	11	43	14	44	25	87	0.0
38	1963	第10集	1	0	0	0	1	0	12	40	14	42	26	82	0.9
39	1964	第11集	0	0	1	1	1	1	13	43	14	42	27	85	1.8
40	1965	第12集	1	1	0	0	1	1	16	43	22	40	38	83	1.7
41	1966	第13集	0	3	0	0	0	3	18	40	17	43	35	83	2.5
42	1967	第14集	0	0	1	2	1	2	14	44	20	42	34	86	2.5
43	1968	第15集	0	2	0	3	0	5	10	43	18	46	28	89	4.3
44	1969	第16集	0	1	0	0	0	1	14	47	8	46	22	93	0.9
45	1970	第17集	0	0	0	0	0	0	10	46	11	48	21	94	0.0
46	1971	第18集	1	4	0	3	1	7	11	50	15	47	26	97	6.5
47	1972	第19集	0	0	3	3	3	3	15	57	7	58	22	115	4.4
48	1973	第20集	0	3	0	1	0	4	11	51	9	48	20	99	3.4
49	1974	第21集	0	2	0	9	0	11	13	47	5	53	18	100	9.3
50	1975	第22集	0	3	0	4	0	7	11	53	12	54	23	107	5.4
51	1976	第23集	0	5	0	3	0	8	13	51	10	56	23	107	6.2
52	1977	第24集	0	0	0	3	0	3	12	47	11	50	23	97	2.5
53	1978	第25集	0	1	0	4	0	5	12	46	12	45	24	91	4.3
54	1979	第26集	0	1	1	2	1	3	18	44	11	43	29	87	3.4
55	1980	第27集	0	1	0	7	0	8	19	47	12	43	31	90	6.6
56	1981	第28集	0	1	0	3	0	4	19	50	13	47	32	97	3.1
57	1982	第29集	0	2	0	5	0	7	15	46	16	41	31	87	5.9
58	1983	第30集	1	2	0	3	1	5	15	46	13	40	28	86	5.3
59	1984	第31集	0	2	0	4	0	6	9	51	13	46	22	97	5.0
60	1985	第32集	0	0	0	7	0	7	14	46	14	46	28	92	5.8
61	1986	第33集	0	3	0	3	0	6	15	45	14	43	29	88	5.1
62	1987	第34集	0	3	0	3	0	6	17	45	14	45	31	90	5.0
63	1988	第35集	0	3	0	3	0	6	13	57	16	46	29	103	4.5
1	1989	第36集	0	2	0	5	0	7	12	46	12	51	24	97	5.8
2	1990	第37集	1	0	0	1	1	1	17	43	12	48	29	91	1.7
3	1991	第38集	0	1	0	5	0	6	13	51	14	46	27	97	4.8
4	1992	第39集	0	2	1	3	1	5	17	46	16	46	33	92	4.8
5	1993	第40集	1	2	0	1	1	3	16	46	14	49	30	95	3.2
6	1994	第41集	0	3	1	0	1	3	18	48	18	49	36	97	3.0
7	1995	第42集	2	6	4	3	6	9	18	48	18	47	36	95	11.5
8	1996	第43集	0	2	1	5	1	7	16	50	17	47	33	97	6.2
9	1997	第44集	0	4	0	3	0	7	15	51	21	44	36	95	5.3
10	1998	第45集	1	1	0	1	1	2	18	55	18	44	36	99	2.2
11	1999	第46集	0	3	0	4	0	7	20	55	12	59	32	114	4.8
12	2000	第47集	1	0	3	4	4	4	14	50	22	54	36	104	5.7
13	2001	第48集	1	2	0	1	1	3	23	53	16	51	39	104	2.8
14	2002	第49集	0	3	1	2	1	5	18	54	18	48	36	102	4.3
15	2003	第50集	0	4	1	4	1	8	26	59	20	45	46	104	6.0
16	2004	第51集	0	2	1	6	1	8	12	47	13	57	25	104	7.0
17	2005	第52集	0	1	0	2	0	3	13	50	18	46	31	96	2.4
18	2006	第53集	0	2	0	4	0	6	13	42	15	46	28	88	5.2
19	2007	第54集	0	2	0	4	0	6	22	51	15	51	37	102	4.3
20	2008	第55集	0	2	0	3	0	5	24	51	17	51	41	102	3.5
21	2009	第56集	0	1	0	2	0	3	23	48	20	50	43	98	2.1
22	2010	第57集	0	3	0	3	0	6	20	50	20	48	40	98	4.3
23	2011	第58集	1	1	0	1	1	2	20	51	16	54	36	105	2.1
24	2012	第59集	0	2	0	2	0	4	20	50	17	50	37	100	2.9
25	2013	第60集	1	4	1	5	2	9	20	52	19	51	39	103	7.7
			34 258						1754 5512						4.0
			292						7286						

全作品に占める平和作文の割合を年度別に見ていくと、初期の約一〇年間は割合が低いことがわかる。一定の頻度で4%程度になるのは、一九七一年（第一八集）頃からである。教育現場で、平和教育が組織的に推進され始めた時期と重なる。なお、一九九五年（第四二集）が11%と突出して高いのは、この年が戦後五〇年であったことと関係していると思われる。

## 5. 「文集ひろしま」における平和作文の個別の特徴

### (1) 父母から聞いた話

戦争を体験していない学習者が戦争体験を知るのは、身近な人である父・母からである。作文には父や母から聞いた戦争の話が、かなり早い時期から登場するが、聞き書きの形式を意識して書かれるようになるのは一九七〇年頃からである。その頃に書かれた優れた聞き書きの作品の一つに、一九七三年の「母から聞いた原爆の話」(Note)がある。(※題名の後に括弧書きで付した数字は、論者が文集から抽出した平和作文の通し番号を示す。以下同じ。)

やがて、母は、当時のようすを、ぼつりぼつりと話し始めました。

「そうよねえ。久美ちゃんより三つ小さかったかね……。」

母が小学校二年生の時でした。二年生からは、学童そかいと  
いうのがあったけれども、母はとてもからだが弱く行けなかつ

たのだそうです。一つ年上のおにいさんは、八幡村といういなかへ、そかいをしていました。戦争もはげしくなってきたので、高学年は観音小学校で、低学年は近所の大きな家をかたり、お寺で勉強をしていました。そのころは戦争がとてもしげしく「空しゅう、空しゅう。」で、ろくに勉強もできず、夏休みもありませんでした。

その日も、母は八時ごろ、近所のお寺へ行きました。本堂の階段にすわり、勉強が始まるのを待っていると、飛行機の音が聞こえてきました。空を見上げたしゅんかん、「ピカッ」と、いなづまのような強い光を首すじに感じおどろいた母は、本堂にとびこみ、かばんを取ろうとしたとたん、「ドカーン。ガラガラガラガラ。」というものすごい音とともに、まっさかさまに谷底につきおとされるような気がしました。

この後、作文では崩れた本堂からはい出て助かったこと、多くの友達が下敷きになったまま火の海の中で死んでいったことがていねいに書かれている。

この引用した箇所には、語り始める前の母の様子を描写し、伝聞表現を用いて本論に入ると、その時の様子を簡潔な説明と、巧みな描写を用いて実にいきいきと描かれている。まるでその場にいたかのような書き方である。五年生でここまで書くことができたというのは母と子というきわめて近い関係であり、言葉を越えて親子として通じ合うものがあつたからではないだろうか。

(2) 祖父母から聞いた話

少し年が経つと、聞き書きの相手は父母から、祖父母に変わってくる。祖父母に聞いた話を書く時は、なぜか父母の場合にはあまり見られなかった内容が登場する。たとえば、一九八〇年の「はだしのゲン」を見て「(1981)」は、聞き書きではないが、その特徴がよく表れている。

それでも中岡一家のゲンと、その母は強く立ち上がって麦のように明日へ向かって明るくのびていったのだった。「あれっ、おじいちゃんがない。」と思っただけは映画の途中だったなあ。わたしのとなりの席にいたはずの祖父がいないのだ。母に聞くと、祖父は、つかれたのではなく、「もうあの原ばくを思い出したくない。」と、ぼつんといひ残して、休けい場に出た、ということだった。

そういえば、原ばくの話など祖父の口からあまり聞くことがなかった。祖父の大事な妹の一人を、ちょうどあの映画のと同じように、自分の家の下にしかれてなくした、ということを知ることがされていた。祖父は、あのおそろしい原ばくを思い出すのがつらくてとても見ている気になれなくなつたのだろう、と思つくと、わたしは祖父が、急にかわいそうになり、むねが、はりさけそうになつた。

ここには、悲惨な体験を思い起こして語る時の「語りがたさ」と、その「語りがたさ」に気づく自分の姿が生き生きと描かれてい

る。戦争体験を聞くことの意味は、もちろん戦争体験の事実そのものにあるのだが、同時に語る人の思いに近づくことでもあることを、この作文は如実に示している。これ以降の作文にも、祖父母の聞き書き作文には、語り手を気遣う表現がたくさん登場する。

(3) 被爆体験者から聞いた話

やがて被爆体験を聞いて学ぶ学習は、学校の中に被爆者の語り部を招いて話を聞く、という形で展開されるようになる。次にあげるのは、一九九七年の「あの日が来るたびに」(20198)である。(※傍線部は論者による。以下同じ。)

「炎の色も炎でなく、むらさき色にごつた炎が、とつ風と共にせめ寄せる……。」

あの日が来るたびに、かたりべの大島さんは、今でも身ぶるいしてしまつてます。

八月六日の朝は、目ざましがわりの太陽の光がまどからギラギラと流れこむくらいだつたそうです。大島さんは、台所でふかしたてのいもで、だんごを一つ作り終えたところでした。二つ目に取りかかったしゅん間、

「ビーがきた、ビーだ、ビーだー」

という声。さわぎだした近所の人たちの声と同時に、死にもものぐるいで防空ごうに転がりこんだそうです。うつぶせになつて、B―二十九号が飛び過ぎるのをどんなに不安な気持ちで冷やあせを流しながら待ったことでしょう。いつおそつてくるか

分らない敵に、大島さんは、ただおびえ続けなければならなかったことでしょう。そう思うと、わたしの心は、はりさけそうになりました。ものすごく音とともに地ひびきが終わってきたそうです。心の中は、めちゃくちゃにかき回されたような気分になったそうです。

語り部から聞いた話をもとに、出来事、語り部（大島さん）の気持ち、わたしの思いに分けて、巧みに表現している。特に、語り部の話に出てくる大島さん自身に同化して、その気持ちに寄り添って書こうとしているところが優れている。

しかし、先の祖母の聞き書きの場合と比べると違いがある。一つは近親者だからこそ感じ取ることが出来る気持ち（さきの場合であれば「祖父の語りがたさ」が弱いということである。もう一つは、伝聞表現「そうだ」が多いということである。聞いた話を書くためには、伝聞表現を用いる必要がある。断定表現で書くと、断定の判断は誰が行ったのが問題になる。さらに、様子を詳しく表現しようとして描写すると、それは事実なのかという問題が生じる。聞いたことを正確に書くには、伝聞表現を用いるのが最も簡単である。しかし、一方で伝聞表現を多用すると、まるで他人事のように書いているという印象を与えかねない。この作者も、そのようなことに頭を悩ませながら書いたものと思われる。

これから教育現場では、「語り部」ではなく「被爆体験伝承者」を招いての平和学習が実施されることだろう。父母の場合、祖父父母の場合、語り部の場合、それぞれ学習者が書く作文には違いが見ら

れる。被爆体験伝承者の場合は、どのような作文になるのだろうか。

#### (4) 身近な出来事を取り上げて

平和作文には、身近な出来事を取り上げて書いた作文もある。次あげるのは、一九七六年の「原爆」(No71)である。

「病院の受付でノートみたいなん、だしたじゃろう。あれ、なに。」

「あれねえ。原爆手帳よねえ。」

と、母は、いそがしさのせいかな、らんぼうないいかたでいった。

わたしは、べつに悪いことをいったのじゃないのに、あまりにも、母がらんぼうない方をするので、はらをたて、

「それ、なにするものねえ。」

と、反抗的にいった。

すると、母は、

「病院へ行って、うけてもただなんよねえ。」

と、また、らんぼうな口調でいった。

わたしは、母がなにかおこつてるようだけど、なにをおこっているかわからず、そのとき、すこしふしぎだった。

……(略)……

わたしは、原爆手帳をみせてもらった。

それには、いつ生まれたか。どこで、何さいの時に原爆に

あったか。そこは、原爆のおちたところから、何キロメートルぐらいはなれたところかということがかいてあった。それをみて、母は、今のわたしと同じ年の十二さいの時に原爆にあっていることを知った。それに母は、原爆がおとされたところから、わずか三キロメートルのところに行ったのだ。わたしは、はっとした。

母が持っている被爆者健康手帳を題材にした作文である。ふだんは聞くことのない母の被爆体験を、手帳に書かれた内容から自分なりに想像し、今の自分と重ね合わせて考えたことを書いている。ここには戦争の悲惨さの具体的な内容は出てこないが、戦争体験は決して過去のもではなく今も身近なところであり、そして、身近にいる人がそれを内に秘めて毎日を生きていることを、子どもなりに考えている。身近なものから平和について考えた優れた作文である。

この作品の〈評〉には、次のようにある。

前半のおかあさんとの対話、後半の原爆をみつめ考える文章と、うまくかみあつたよい文章です。頭の中で原爆反対と書く文章よりもぐっと読む人の心をゆさぶり、岸さんの主張に同意する人がうんと多いと思います。

この評から、この時期すでに「頭の中で戦争反対と書く」ような観念的な作文があつたこと、そして、そのような作文を書くことを

戒めるような指導が行われていたことが分かる。

平和を考える作文の材料は、他にもある。次にあげる一九八四年の「平和について」(No113)では、こんな話題が取り上げられている。

わたしは、三年生になったとき、広島に引越してきました。

……(略)……広島にだいぶ慣れてきて、初めての夏休み。旅行に行った帰りの新幹線のことです。食堂車で食事していたら、向かいに座っていたどこかの校長先生が、

「どこへ行くの？」

「広島に帰るとい。」

と言うと、広島の話になりました。

「広島は平和、平和と言います。」

と、その校長先生が言いました。お母さんに、

「すごくいやな感じがした。」

と言うと、お母さんは、にっこりして、

「広島の子になつたね。」

と言いました。

自分の信念が少し傷つけられたと感じる私と、その様子をほほえましく思う母親の姿が描かれていてほっとする作文である。このような作文を見ると、平和作文の材料は私たちの身近なところになくさんある気がしてくる。

(5) 問いかけ「なぜ戦争するのだろうか」

平和教育が教育現場に浸透していくのに反して、世界では戦争や平和を脅かす出来事が次々起こるようになる。一九六一年の「近ごろの世界」(No6)には、東西ベルリンの問題、キューバ問題、ベトナム戦争が、一九八〇年の「イランとイラクの戦争」(No86)には、イラン・イラク戦争が、取り上げられている。このような世界平和の願いと逆行するような出来事を前に、作文の中には子どもたちのいらだちの気持ちが書かれたのが見られるようになる。その中には、いらだちの気持ちを、問いかけの形で表現したものがあ

る。

一九八三年の「えい画「クリスマスツリー」を見て」(No104)には、次のような表現が出てくる。

三十八年前の八月六日のことは、もっとひどかったでしょう。えい画を見て帰るとき、明日の八月六日の平和式典の準備で、大ぜいの人がいました。でも、こんなことで戦争は、本当になくなるのでしょうか。わたしは、外国の人が、平和公園など原爆に関係するところを、見物に来るのをよく見かけます。でも、この人たちは、ここへきて何を知ったのでしょうか。ただ見に来て、「戦争はなくすべきだ。」と言ってはいるけど、その人たちの国では、今も原子ばくだんの道を広げるため、かく実験を毎年やって戦争への準備をしているのに。

「こんなことで戦争は、本当になくなるのでしょうか」「この人た

ちは、ここへきて何を知ったのでしょうか」という問いかけには、大人への批判が込められている。

疑問ではなく、明らかに強い憤りを表す方法として問いかけを用いているものもある。一九九五年の「戦後五十周年——かく実験について」(No184)には、次のようにある。

こんな風に、世界中の国や人々が、平和を大切にしているのにもかかわらず、フランスは、かく実験を強行した。「どういう考えで、こんなことをするのか分からない。いや、分かりたくない。」と思った。青くすき通った海が、真つ白になる。すごいしぶき。「こんなきれいな自然を、きたなくするようなことは絶対してはいけない。」わたしは、強く強く思った。「フランスは、自分の国を守るためか、かくを使っても、きずついて死んでいくのは、結局同じ人間じゃないか。」と思う。

「いや、分かりたくない」とは、どういう意味だろうか。問いかけておきながら、その答えを求めない、というのは相手からのどんな答えも拒否し、認めないということである。それだけ、相手の行為や主張は誤りであることを強く主張しているのである。しかし、この表現では相手には伝わらない。なぜなら、相手に質問や反論の機会を与えず、自己の主張を一方的に押し付けることになっているからである。

ただここで問題にすべきことは、この表現が一方的であるから改めるべきであるということではない。六年生の作者にとってはそれ



くらい大切な問題に思ったということを私たちがまず受け止めてやることであり、その上で、これからの学びの中で、いかにすればこの主張が相手に伝わるのかを考えさせることである。つまり、中学・高校の平和教育の課題である。

(6) 言葉にできないもの

平和作文の中には、戦争の悲惨さや平和への願いを強い表現で主張しないものもある。次にあげるのは、一九七一年の「江田島」(No30)である。

五月の日曜日に、ぼくとおとうさんと、江田島にある海軍兵学校のあとへ行きました。

宇品の県営さん橋から船に乗って、一時間三十分で江田島に着き、そこからバスに乗って兵学校あとの所まで行きました。

……(略)……

ぼくは、見学する前には、かつこよくて勇ましいことばかり考えていましたが、すんで門を出るころには、初めの思いとはとても変わっていました。

おとうさんが、「どうだったか。」

とききました。ぼくは、

「まずいばんにいえることは、戦争はぜったいにしてはいけないうことじゃね。」

と言いました。いろいろな思いが胸につまったようでした。帰りの船の中でも特別攻げき隊の人たちのことが頭からはなれま

せんでした。

作者は、「戦争はぜったいにしてはいけない」ということは言葉では言えたが、それ以上のことは、「いろいろな思いが胸に」つまり、「特別攻げき隊の人たちのことが頭から」離れなかったという。すぐには言葉にならないほど考えることが多かったというのである。

二〇〇八年の「忘れない夏」(No261)には、次のようにある。

私は、八月十三日に、静岡のおじいちゃんの家で、「忘れない夏」というテレビ番組を見ました。それは、おじいちゃんが、今年の八月六日に広島に来て、平和式典に参加したことを撮影したものでした。おじいちゃんは、原爆のことは話してくれません。原爆に対してどう思っているのかも知りません。おじいちゃんから、被爆体験も聞いたことはありません。でも、私は、「忘れない夏」をみて、おじいちゃんが、「ぜったい核兵器を廃絶して欲しい。」と願っていることがわかりました。

……(略)……

今年の夏、静岡の浜松に行って、おじいちゃんとすごして、おじいちゃんが、原爆に対してどう思っているのが少しわかった気がします。私は、おじいちゃんから直接被爆体験を聞いてみたいです。そして、その体験を、「私が次の世代に伝えていきたい。」と思いました。

おじいちゃんに聞いても「おじいちゃんは、原爆のことは話してくれ」なかつたという。「少しわかつた気がします」とあるように、自分でもおじいちゃんの気持ちを中心に理解できていないことを承知している。確かに、おじいちゃんの気持ちを掘り下げて理解していないと批判することもできる。しかし、ここで重要なのは、「私」がおじいちゃんに寄り添い、語ろうとしないことを重く受け止めようとしたことである。

## 6. 結論

「文集ひろしま」に掲載された平和作文から、平和を題材にした作文の学習指導するための知見を整理すると、次のようにいうことができる。

### (1) 題材の開発

・ 戦争体験そのものではない出来事(周辺)にも、取り上げべき価値のある題材がある。戦争体験を語る相手と学習者との関係は、貴重な題材である。その他にも、被爆者健康手帳や新幹線内での出来事など、小さな出来事に着目すれば題材は豊富である。また別な言い方をすると、豊富であるにもかかわらず、まだ題材の開発は十分ではない。

### (2) 表現指導の工夫

・ 戦争体験に接した時、小学生は恐怖や怒りなどの強い衝撃を受ける。そして、その衝撃を打ち消そうとするかのように、自分の思いををあえて強い言葉で表現しようとすることがある。

その表現は適切ではないかもしれないが、学習者がテーマを重く受け止めていることのあらわれであり、授業者はまずその表現を受け止めることが重要である。

・ 平和教育の課題として、自分の身近なことはよく知っているが、文化や言葉の異なる他者への理解は乏しいということが度々指摘されてきた。先の強い表現にも、その問題点がうかがわれる。問いかけなどの表現に見られるこのような問題は、中学や高校での平和作文の学習指導の中で取り上げて他者理解へと展開するよい材料になる。

・ 学習者は、戦争体験について聞いたり学んだりしたことを、重く受け止め自分の問題として書こうとする。その時、他人事にならないように、描写、説明の表現を組み合わせて用いたりする。また、あえて言葉にしないこともあったりする。そこにとどのような意味があるかを考えさせながら表現指導する必要がある。

### 《引用文献》

- 1 「被爆体験伝承者の活動始まる」 広島市、3年かけ養成、「朝日新聞」、二〇一五年四月二一日(火)朝刊、広島版
- 2 植木昭・細井迪(二〇〇〇)「二 文集ひろしま」、『広島市小学校教育の歩み ―戦後―』、ひろしま国語教育大河の会編、溪水社、pp.98-103

(広島経済大学)